

# 医学生と看護学生の合同演習前後での 医師・看護師に対するイメージの変化

辻 慶子<sup>1</sup>・鷹居樹八子<sup>1</sup>・半澤 節子<sup>1</sup>・石原 和子<sup>1</sup>

**要 旨** 「医学・看護学に通な患者や家族へのコミュニケーションについて学び、それぞれの立場から支援のあり方について意見交換する」という目的で、模擬患者とのコミュニケーション演習を看護学生と医学部生との合同で行った。各学生が両者の職種をどのように捉えているかを演習前後に調査した。その結果、看護学生は医師に対して、実習前には「診療や治療」というイメージを持ち、それが演習後には「インフォームドコンセントや看護職との連携を重視したクライアント中心」というイメージを持った。医学生は看護職に対して、実習前には「補助者としての役割」というイメージを持ち、演習後には「看護の専門性をみとめた理解」というイメージを持った。以上のことから、合同演習による共習が相互理解と協働に向けて有効な教育方法であることがわかった。

長崎大学医学部保健学科紀要 15(1): 69-74, 2002

**Key Words** : 看護教育, 医学教育, 医療職のイメージ, 模擬患者

## はじめに

近年の加速する高齢化社会に伴う国民のニーズに対応するには、保健医療専門職の連携によるサービスと資質の向上が必要である。また、最近では医学教育における早期の看護実習体験が、看護への理解を持ってもらうよい機会として重要であり、将来の良い医療チームワークづくりにつながるとして、効果も認められてきた。今回、「医学・看護学に通な患者や家族へのコミュニケーションについて学び、それぞれの立場から支援のあり方について意見交換する」という目的で、模擬患者とのコミュニケーション演習を医学生と看護学生の合同で行った。各学生が両職種をどのように捉えているかについて、演習前後の変化を明らかにし、今後の教育に生かすことを目的に研究を実施した。

## 研究方法

対象は、N大学医療技術短期大学部看護科3年生75名と同大学医学部6年生81名であった。合同演習は平成18年7月13日に実施した。演習は、2つの事例A、Bについて医学生と看護学生が医師、看護職役になり模擬患者役 (SP: simulated patient) とコミュニケーションを行う形式で実施した。事例Bでは実際の医師による面接も行われた。その後、医学生と看護学生10名のグループに分かれ討論を行った。

事例Aは「65歳の女性で、『熱があって、きつい』との訴えで救急外来を訪れた。看護職役は病歴聴取 (8分)、医師役は身体所見、検査結果と治療計画の説明 (15分) を行う」という設定であった。事例Bは、「癌告知 (胆管癌で進行癌、これまで糖尿病で受診していた) を受け

た妻が動揺しているのを、代わりに長女 (埼玉在住) が主治医に詳細な話しを聞きに来るといった設定であった。対象者に口頭で研究の主旨等を説明し了解を得た後に、合同演習の前後に両職種に対するイメージを自由記述してもらった。自由記述内容を一文章一意味に整理し、分析した。分析後、保健師助産師看護師法 (以下、保助看法とする) 及び医師法による定義を活用してカテゴリーに分類し、単純集計した。分析にあたっては複数の教官の意見が一致するまで繰り返し行った。

看護学生は、一般教育科目、専門基礎科目、専門科目 (基礎看護学、成人看護学、老年看護論、小児看護学、母性看護学、地域看護論、共通特論)、臨地実習 (基礎看護学実習) が終了していた。各看護学実習、学科特論が進行中であった。医学生は、全学教育科目、医と社会、人間生物学、人体の構造と機能・代謝、疾患総論、疾患各論、診断学、外科治療学、リサーチセミナー、法医学、社会医学、総合科目が終了していた。各診療科の総括講義・臨床実習、臨床特論、医と社会、熱帯医学が進行中であった。

## 結 果

### 1. 自分の専門職に対するイメージ

看護学生から見た看護職 (表1): 抽出された内容を保助看法による看護職の定義「傷病者もしくは褥瘡に対する療養上の世話または診療の補助を行う者」に基づいて分類した。その結果、「療養上の世話」は、演習前4項目38 (46.9%)、演習後4項目36 (46.2%)であった。内容の変化では、精神的サポート、家族のサポートがわずかに上昇していた。

1 長崎大学医学部保健学科看護学専攻

「診療の補助」は、演習前3項目19 (23.5%)、演習後3項目14 (15.1%)と減少した。

保助看法による定義以外の記載としては、「職業イメージ」が、演習前4項目16 (19.8%)、演習後3項目15 (16.1%)であった。「連携」は、演習前3項目6 (7.4%)、演習後1項目9 (9.7%)であった。「クライアント中心」は、演習前1項目1 (1.2%)、演習後3項目11 (11.8%)と増加した。「連携」の内容は、医師と患者の橋渡しが増加していた。「クライアント中心」は演習後に大きく増加した。

医学生から見た医師 (表2) : 抽出された内容を医師法による「医師でなければ、医業をなしてはならない」に基づいて分類した。「診療」は、演習前の4項目40 (60.6%)から演習後の2項目17 (30.0%)に減少した。医師法以外では、「連携」が、12 (18.2%)から6 (9.5%)に、「職業イメージ」が、7 (10.6%)から3 (9.5%)に減少した。「クライアント中心」は7 (10.6%)から15 (23.8%)に上昇した。「連携」の内容は、演習前には「チーム医療の中心」であったが、演習後は「看護職との関係」が増えた。「インフォームドコンセント」は演習前0から演習後17 (30.0%)と大きく増加した。

## 2. 他の専門職に対するイメージ

看護学生から見た医師 (表3) : 演習前に多かったカテゴリーは、「職業イメージ」45 (54.2%)、「治療」が26 (31.3%)であった。演習後は「職業イメージ」が14 (23.0%)に減少した。「治療」は24 (39.3%)とほぼ同様であった。「インフォームドコンセント」は14 (23.0%)に増加した。演習前では「患者と接する機会が少ない」「患者自身よりも疾患にアプローチする。」などの表現が多かった。演習後は、「安心・信頼を与える」「共感」「患者のことを考えている」という患者中心の表現へと変化した。

医学生から見た看護職 (表4) : 「療養上の世話」は演習前26 (34.7%)が、演習後20 (41.7%)となり、大きな変化はなかった。「診療の補助」は14 (18.7%)から1 (2.1%)に大幅に減少した。また、「職業的イメージ」が24 (32.0%)から16 (29.6%)と若干減少した。「連携」は8 (10.7%)から14 (25.9%)と上昇した。演習前には仕事内容を「よく分からない」が3 (4.0%)あったが、演習後は消失した。また、「生活面を重視している」や「共感している」など、看護を理解する意見が増加した。また、「看護職がチーム医療の中心である」1 (1.9%)という表現も見られた。

## 考 察

### 1. 演習前後の変化

看護学生から見た看護職イメージは、演習前後とも精

神的サポートが最も多かった。また「クライアント中心」が演習後に大きく上昇していた。これは、看護の対象は「人間」であり、人との関わりが看護に影響することを学んだ結果といえる。さらに、今回の演習においてコミュニケーション技術の重要性を再認識した結果だと考える。看護学生から見た医師イメージは、演習後、「インフォームドコンセント」「安心・信頼を与える」「クライアント中心」というイメージに変化していた。医療専門職とその役割や医療の場については、看護原論 (2時間) の講義と臨床実習において学んでいる。看護学生は合同演習によりより具体的な医師に対するイメージを持つようになったと考えられる。

医学生から見た医師イメージは、演習前には「診療」が半数以上を占めていた。演習後は「診療」が約3分の1となり、「クライアント中心」、「インフォームドコンセント」の重要性が多く言及された。これは、今回の設定事例場面に影響された結果と考える。

医学生から見た看護職の役割は、演習前は「診療補助」、「療養上の世話における精神的サポート」が多かった。演習後は「診療補助」は減少し、視点が多様になった。また、演習後には看護職に対する抽象的イメージは減少した。

医学教育の中で看護職について具体的に学ぶ機会は、少ない。実習などでも看護職の役割を教えることは少ない。そのため、医学生は看護職を漠然としたイメージで捉えていたと考える。今回の模擬患者に対する、医師、看護職それぞれの立場からのコミュニケーションにより看護の役割が理解でき、具体的な表現になったと考える。また、看護職との連携についても演習前後に大きな差が見られた。場面を通してではあるが、クライアント中心という医療のあり方が出来たと考えられた。

### 2. 専門職としての捉え方と、協働と連携

看護学生の捉えた看護職の専門性を分析すると、「療養上の世話」や「診療の補助」とともに、「クライアント中心」という捉え方が演習後に増加した。このことは、模擬患者とのコミュニケーション場面から常に「クライアント中心」ということが理解できたと考える。

医学生は演習前には医師の専門性を「診療」と捉え、演習後には「インフォームドコンセント」「医学の知識・情報の必要性」「看護職との連携」「他の医療従事者との関係」等の重用性を認識するようになった。

濃沼ら<sup>5)</sup>のチーム医療推進の方策に関する研究では、チーム医療への貢献度を医師と看護婦に調査した結果、医師は看護職よりも医師の貢献が大きく、看護職は医師も看護職も同じとしていた。このような食い違いは、チーム医療推進の障害になりかねない。医療現場が拡大し、診療の複雑性が増し、患者の権利が強調されている状況において、他医療専門職に対する正しい知識と理解が不可欠となっている。江守ら<sup>2)</sup>によると、看護者が医学生

医学生と看護学生の合同演習前後での医師・看護師に対するイメージの変化

表 1. 看護学生から見た看護職のイメージ

	演 習 前	N = 81 (%)		演 習 後	N = 93 (%)
療養上の世話 37 (45.7%)	精神的サポート	22 (27.2%)	療養上の世話 43 (46.2%)	精神的サポート	29 (31.2%)
	日常生活への援助	8 (9.9%)		家族のサポート	7 (7.5%)
	家族のサポート	6 (7.5%)		日常生活への援助	6 (6.5%)
	ADLの拡大への援助	1 (1.2%)		身体的ケア	1 (1.1%)
診療の補助 19 (23.5%)	治療・処理の介助	10 (12.3%)	診療の補助 14 (15.1%)	医学的知識が必要	6 (6.5%)
	異常の早期発見	5 (6.2%)		説明の補充	4 (4.3%)
	疾患に対するケア予防	4 (4.9%)		治療・処置の介助	4 (4.3%)
職業イメージ 16 (19.8%)	忙しいイメージ	6 (7.4%)	職業イメージ 15 (16.1%)	笑顔	10 (10.8%)
	身近な存在	4 (4.9%)		身近な存在	3 (3.2%)
	優しい	3 (3.7%)		優しい	2 (2.2%)
	笑顔	3 (3.7%)			
連 携 6 (7.4%)	医師と患者の橋渡し	3 (3.7%)	連 携 9 (9.7%)	医師と患者の橋渡し	9 (9.7%)
	医師との連携	2 (2.5%)			
	チームのバランスとり	1 (1.2%)			
クライアント中心 1 (1.2%)	患者中心に考える	1 (1.2%)	クライアント中心 11 (11.8%)	共感	9 (9.7%)
				生きる力を与える人	1 (1.1%)
				信頼関係をつくる	1 (1.1%)
その他 2 (2.5%)	患者をよく理解している	2 (2.5%)	その他 1 (1.1%)	道具なしで看護ができる	1 (1.1%)

表 2. 医学生から見た医師のイメージ

	演 習 前	% (N = 66)		演 習 後	% (N = 63)
診 療 40 (60.6%)	診察・検査・治療の実施	33 (50%)	診 療 17 (30.0%)	医学的知識・情報が必要	9 (14.3%)
	指導	3 (4.5%)		治療	8 (12.7%)
	患者に説明をする	3 (4.5%)			
	社会復帰の手伝い	1 (1.5%)			
連 携 12 (18.2%)	チーム医療の中心	10 (15.2%)	連 携 6 (9.5%)	看護職との連携	4 (6.3%)
	看護職との関係	2 (3.0%)		他の医療従事者との関係	1 (1.6%)
				チーム医療の中心的存在	1 (1.6%)
職業イメージ 7 (10.6%)	患者と接する機会が少ない	3 (4.5%)	職業イメージ 6 (9.5%)	医師はコミュニケーション能力が重要	3 (4.8%)
	医療ミスの責任	1 (1.5%)		患者の信頼を得る	2 (3.2%)
	制度の確立がない	1 (1.5%)		ハードな業務	1 (1.6%)
	科学者であり、サービス業である存在	1 (1.5%)			
	忙しそう	1 (1.5%)			
クライアント中心 7 (10.6%)	精神的サポート	5 (7.6%)	クライアント中心 15 (23.8%)	患者・家族へのサポート	6 (9.5%)
	患者と共に病気と闘う存在	2 (3.0%)		患者の気持ちを考える	5 (7.9%)
				患者と共に病気を治していく	3 (4.8%)
				共感	1 (1.6%)
			インフォームドコンセント 17 (30.0%)	インフォームドコンセント	17 (30.0%)
			演習に関して 2 (3.2%)	講義前後の変化なし	1 (1.6%)
				こんな良い人ばかりではない	1 (1.6%)

表3. 看護学生から見た医師のイメージ

	演 習 前	N = 83(%)		演 習 後	N = 61(%)
治 療 26 (31.3%)	患者自身よりも疾患にアプローチする	10 (12.0%)	治 療 24 (39.3%)	治療・診察	11 (18.0%)
	治療・診断を行う	9 (10.8%)		医学的知識が必要	6 ( 9.8%)
	医学的知識が必要	3 ( 3.6%)		精神的サポート	5 ( 8.2%)
	精神的サポート	3 ( 3.6%)		家族のサポート	2 ( 3.3%)
	家族のサポート	1 ( 1.2%)			
職業イメージ 45 (54.2%)	患者と接する機会が少ない	18 (21.7%)	職業イメージ 14 (23.0%)	安心・信頼を与える	8 (13.1%)
	精神的な面では関わりがない	5 ( 6.0%)		やさしい	3 ( 4.9%)
	偉そう	4 ( 4.8%)		患者と同じ目線の医療	1 ( 1.6%)
	患者から信頼されている	4 ( 4.8%)		命の大切さを知らせる存在	1 ( 1.6%)
	親しみにくい	3 ( 3.6%)		信頼される存在	1 ( 1.6%)
	医学生の実習は甘い	2 ( 2.4%)			
	冷たい	2 ( 2.4%)			
	無神経	2 ( 2.4%)			
	看護職よりも患者の情報をしらない	2 ( 2.4%)			
	患者のがんばりをみとめない	2 ( 2.4%)			
	忙しい	1 ( 1.2%)			
	連 携 9 (10.8%)	看護職に指示を行う		5 ( 6.0%)	連 携 4 (6.6%)
看護職を見下している		4 ( 4.8%)			
インフォームド コンセント 3 (3.6%)	インフォームドコンセント	3 ( 3.6%)	インフォームド コンセント 14 (23.0%)	インフォームドコンセント	14 (23.0%)
			クライアント中心 5 (8.2%)	共感	3 ( 4.9%)
				患者のことを考えている	2 ( 3.3%)

に期待するものは、「チーム医療の重要性を理解する」「患者の気持ちや心理状態を知る」「看護者の仕事の内容を理解する」「患者の側から医療を理解する」であった。今回の演習後、医学生はこれらの点によく気づき、記述していた。他職種の専門性を理解するためには、単独での講義や実習よりも合同演習による共習の効果が大きいと言える。また、模擬患者が入ることによって合同演習による共習効果が増大したと考える。

将来医療チームの中で互いの役割を理解し尊重しながら、専門職として独立し、クライアント中心に協働していくことが必要である。その一つの教育方法として、早期からの教育体制を整え、体験と客観的に評価する学習の機会を作ることである。連携の方法は多様だが他職種の専門性の理解、チーム医療の方法を理解してなければ、協働は出来ないと考える。

#### 4. 今後の課題

看護職と医師は講義や実習で最も身近な医療専門職として接しているが、実際は現象や場面を共有しチーム医療や専門職として理解するなど改めて考えることは少ない。今回の調査が、看護学生3年生、医学生6年生の7

月であり、臨床実習の経験があったことにより、ロールプレイを評価することが可能になった。またチーム医療やクライアントに対する役割についても考えることが出来た。しかし、今回の設定事例場面に影響された内容の抽出であったことは明らかである。今後の検討内容として、互いを理解するための教育内容と方法、教育の時期及び継続性、合同講義の教育評価について更に検討していく必要がある。

#### 謝 辞

調査にご協力頂きましたN大学医療技術短期大学部の3年生の皆様、N大学医学部6年生の皆様に感謝致します。また看護学生と医学生の合同演習の企画、運営をして頂きました、医学部公衆衛生の永田先生、九州模擬患者研究会の黒岩氏に感謝致します。

#### 参考文献

- 辻 慶子, 鷹居樹八子, 岩永喜久子: 看護学科・理学療法科・作業療法科学学生の医療専門職に対するイメージの変化 卒業生の講話とグループワークを通して, 長崎大学医療学部保健学科紀要, 14(2):

表 4. 医学生から見た看護職のイメージ

	演 習 前	N = 75(%)		演 習 後	N = 54(%)
療養上の世話 26 (34.7%)	精神的サポート	14 (18.7%)	療養上の世話 20 (37.0%)	精神的サポート	9 (16.7%)
	日常生活への援助	9 (12.0%)		心理的・精神的・身体的ケア	6 (11.1%)
	コミュニケーション	3 (4.0%)		コミュニケーション	3 (5.6%)
				家族へのサポート	2 (3.7%)
			生活面の重視	1 (1.9%)	
診療の補助 14 (18.7%)	治療・処置の介助	4 (5.3%)	診療補助 1 (1.9%)	治療・処置の介助	1 (1.9%)
	vital check他身体状態チェック	4 (5.3%)			
	医師の指示したことをする	2 (2.7%)			
	医師の補助業務	2 (2.7%)			
	仕事は医師と差がない	2 (2.7%)			
職業イメージ 24 (32.0%)	医師よりも身近な存在	11 (14.7%)	職業イメージ 16 (29.6%)	身近な存在	6 (11.1%)
	優しい	4 (5.3%)		優しく笑顔が大事	5 (9.3%)
	忙しい	4 (5.3%)		接遇が大切	2 (3.7%)
	雑用係ではない	2 (2.7%)		患者に最初に接する	2 (3.7%)
	テキパキとしたしごとぶり	1 (1.3%)		ハードな業務	1 (1.9%)
	事務的作業	1 (1.3%)			
	勤務体制がととのっている	1 (1.3%)			
連携 8 (10.7%)	医師と患者の橋渡し	5 (6.7%)	連 携 14 (25.9%)	患者と医師の橋渡し	7 (13.0%)
	協力する仲間	3 (4.0%)		医師との情報交換	3 (5.6%)
				医師との連携	2 (3.7%)
				他の医療従事者との関係	1 (1.9%)
			チーム医療の中心的存在	1 (1.9%)	
			クライアント中心 1 (1.9%)	共感	1 (1.9%)
その他 3 (4.0%)	よくわからない	3 (4.0%)	その他 2 (3.7%)	医療に対する問題意識がある	1 (1.9%)

115-123, 2001.

- 2) 江守陽子, 紙屋克子, 戸村茂男, 柳久子, 赤沢陽子, 鈴木君江, 相川三保子, 三ヶ田愛子: 看護者からみた「医学教育における看護体験実習」についての意義と課題, 医学教育, 32(6): 433-437, 2001.
- 3) 小林初子, 立川良子, 田中智美, 岩永喜久子, 高橋真弓, 石橋由紀子, 下田澄江, 金井田文恵, 松武滋子, 喜多泰子: 医学部生学生の看護体験実習に対する検討 実習後の意識調査より, 看護管理, 第25回, 58-60, 1994.
- 4) 小林初子, 立川良子, 岩永喜久子, 石橋由紀子, 高橋真弓, 田中智美, 下田澄江, 金井田文恵, 松武滋子, 堀田初恵, 喜多泰子: 医学部生学生の看護体験実習の評価 - 実習後の意識調査より, 看護管理, 第26回, 5-7, 1995.
- 5) 濃沼信夫, 伊藤道哉, 陳霞芬, 長井吉清, 齋田トキ子, 菊池登喜子: チームワーク推進の方策に関する研究, 医学教育, 26(5): 321-322, 1995.

## Changes in images of the role of doctors and nurses through a joined communication training for medical and nursing students

Keiko TSUJI<sup>1</sup>, Kiyako TAKAI<sup>1</sup>, Setsuko HANZAWA<sup>1</sup>, Kazuko ISIHARA<sup>1</sup>

1 Department of Nursing, Nagasaki University School of Health Sciences

**Abstract** A communication training session using simulated patients was conducted. Both medical students and nursing students were participated. The aim of the session is to learn communication skills with patients and their families, as well as to understand the roles of doctors and nurses in clinical settings. Medical students and nursing students played roles together and made communication with simulated patients. Eighty-one medical students and 75 nursing students were asked about images of both doctors and nurses before and after the training session. Nursing students before the session described their image of the role of doctors as medical examination and treatment. Then after the session it changed to getting informed consent with patients and to cooperating with nurses. Medical students before the session described their image of the role of nurses as assistance for treatment. It changed after the session to a collaborating medical staffs (doctors and nurses) with patients, and medical students understand the importance of nursing. The above changes suggest that this exercise was educationally effective towards mutual understanding and collaboration between doctors and nurses.

Bull. Nagasaki Univ. Sch. Health Sci. 15(1): 69-74, 2002